

柏木教会月報

1月号

東京都新宿区北新宿3-1-18 ☎03-3368-2156 www.church.ne.jp/kashiwagi/

生ける神に希望を置いて

テモテへの手紙一 四章一〇節

牧師 富永 憲司

わたしたちが労苦し、奮闘するのは、すべての人、特に信じる人々の救い主である生ける神に希望を置いているからです。（一〇節）

パウロが、福音を携えて伝道に赴いた紀元一世紀後半の古代地中海周辺世界には、希望についてほぼ一致した共通理解がありました。希望とは幻想であり、悪徳である、というものでした。というのも、希望はひと時の夢をもつて人を迷わせ、日々の務めをおろそかにさせ、そして最後は何も変わらないとの辛い悲しい思いをもたらすものだからです。ですから、虚しい希望に欺かれ、誤も分からぬ幻想を抱いて迷わされはならない。日々、為すべきことを為してゆけばよいとされたのです。

そこには、人生や世界の現実に対する深い諦観、知恵がある諦めがあります。人間は変わらない。世界は変わらない。永遠に変わることのない円環的時間の繰り返しの中で、人も世界も永劫に回帰していく。これが冷徹な目を持つたギリシャ人の醒めた人間観、世界観でした。

そのような世界に、パウロは希望の信仰をもつて立ち向かつて行きました。注意してください、その希望はどこまでも「生ける神」あるのです。人間が自分で描き出すような希望ではないのです。そのようなものなら、

失望に終わるのが常かも知れません。しかし、生ける神が確かな希望を与えてくださったのです。そして、この「希望の神」（ローマ一五・二三）の信仰と共に、何かまったく新しい歩みが世界に始まったのです。

実際、この希望の信仰は、自分の人生は何も変わらない。世界は何も変わらない。永遠の昔から、同じものが繰り返されるだけだという諦めの人生観、世界観に、真っ向から挑戦するものとなりました。

「何も変わらない、とあなたは思っているのか。何もないところから何かをお創りになる神が、あなたの中に、まったく新しい命の業をなされるのだ。あなたはこれを信じるか」これがキリスト教信仰の問い合わせでした。「あなたは、過去や現在にのみとらわれず、神の国将来に向かって歩み出しなさい」、これが信仰の勧めでした。

このように、希望の信仰はわたしどもを鼓舞し、「労苦し、奮闘」させて、より良き将来に向かつて展望を切り開いていく原動力となりました。

生ける神が信じられるところ、何か良き出来事への希望をもつて、進まないわけにはいかないのです。ひょっとしたら、古びた信仰が新しくされるかもしれません。心にかけている人の、この人に信仰が生み出されるかもしれません。困難で入り組んだあれこれの事態がまったく新しい展開を見せるかもしれません。ともかく、「無から有を呼び出される神」（ローマ四・一七、口語訳）が信じられるところでは、新しい良きことへのわくわくするような希望がつきまとうでしょう。わたしどもは、「生ける神」が為してくださる神の國の新しい命への希望をもつて、今年もまた心を高くして進むのです。